

## 滋賀県で初確認されたコイのマミズヒダビル症

山本充孝・鈴木隆夫・桑村邦彦

### 1. 目的

感染症の蔓延を防止するためには水際で侵入を防ぎ病原体を持ち込まないことが最も重要であるが、侵入してしまった場合、できる限り早く病原体を完全に取り除いて感染源を遮断することが非常に重要である。

平成29年3月末に滋賀県では確認されていない大型の寄生虫が確認されたため虫体の駆除を行った。

### 2. 方法

高島市内にある複数の「かばた（川端）」で飼育されているコイの鰓蓋内側に大型の寄生虫が多数寄生して平成29年1月頃から死亡し、3月下旬には累積死亡率が最大で60%に達したとの情報が得られた。蔓延を防ぐために地区内にある全てのかばたを訪問し、4月28日にコイ等を1尾ずつ取り上げて虫体の有無を確認して鉤付きピンセットで駆虫を行った。また、5月には確認された地区の周辺を調査し、かばたの上流・下流の集落のコイには寄生の実態がないことを確認した。

### 3. 結果

この寄生虫は、広島大学によって環形動物門ヒル亜綱ウオビル科に属する体側に球形の呼吸囊（イボイボ）を持つウオビルの仲間のマミズヒダビルと同定された（図1）。マミズヒダビルの本来の分布域は中国・韓国で、これまでに寄生が確認された魚種はコイとフナ類のみである。国内では、京都府・大阪府の淀川水系に平成12年から散見されており、秋から翌年春までしか寄生が確認されていないことから、春以降に魚から脱落して産卵し、非寄生体として秋まで過ごしてから魚の鰓に寄生すると考えられている。

今回の駆虫作業では、全長34-83cmのコイ

29個体のうち15個体に寄生が確認され、左右の鰓蓋から計54虫体を除去した。同じかばたで飼育されていたギンブナからも6個体のうち1個体から2虫体が確認された。また、虫体が確認されなかったコイにおいても鰓蓋内側の大半にマミズヒダビルが付着していた痕跡が認められた。虫体の大きさは全長3~7cmであった。

マミズヒダビルの滋賀県内への侵入経路は特定できていないが、確認地区のかばたと琵琶湖の一部地域でしか確認されておらず、かばた内もしくは隣接水路にコイ・フナ類が持ち込まれた可能性が考えられる。琵琶湖で漁獲されたギンブナ、ニゴロブナでも極わずかではあるが寄生が確認されているため、琵琶湖のフナ類には感染が拡大した可能性がある。ただし、京都府・大阪府では大量死は報告されておらず、琵琶湖を含めた天然水域で大きな被害が発生する可能性は今のところ低いと考えられる。



図1 コイに寄生したマミズヒダビル